

世界にメッセージを発信する アグロフォレストリー

地球上の 3 分の 1 の酸素を供給するといわれるアマゾンの熱帯雨林。その開拓は、まさしく大自然との格闘でした。森林を伐採し、焼畑を作り、単一作物を植える方法は浅い表土層の養分を収奪し、トメアスーの基盤作物となったピメンタ（胡椒）も病害により、一時は壊滅状態に追い込まれました。

そこで、トメアスーの日系人が取り組み始めたのがアグロフォレストリー（森林農業）です。異なる作物を混植し、いわば森の中で作物を育てる方法です。成長の速さと、高さが違う作物を組み合わせ、影が必要な植物には他の植物が日陰を提供。落ち葉が表土を覆うと下草が生えず、分解され養分となるので、農薬や肥料も最小限で済みます。同じ畑からは数年ごとに収穫物が入替わり、最後には再生林の森になります。

この方法はもともと自然と暮らすインディオの農法から着想を得たもので、自然の中で研究が重ねられ、生態系を取り入れた組み合わせが確立されました。自然を収奪しない土地利用として、今、アマゾンの日系人が始めた農法が、地球環境の保全に取り組む全世界の注目を浴びているのです。

国際協力を担う日系人

日本人がアマゾン開拓の夢を抱いて入植を始めてから 80 年。いまやその夢は国際協力へと引き継がれています。日本人がはじめたアグロフォレストリーは、自然と共存し、収奪しない持続可能な土地開発法として世界から注目を浴びています。国際協力機構（JICA）は、その前身のひとつ日本海外協会連合会時代より、第 2 トメアスー移住地建設をはじめ、各移住地への営農指導、資金援助、移住者への融資、日系団体に対する事業援助など移住者に対する援護業務を行ってきました。そこに育った移住者・日系人が、いまやわが国が行う国際協力のパートナーとして重要な役割を果たしているのです。



マラカ川流域のアグロフォレストリーの畑 2008

JICA のプロジェクト「アマパ州氾濫原における森林資源持続的利用計画」は、マラカ川、マザゴン川岸の住民と試験的なアグロフォレストリーを実施しています。アグロフォレストリーを現地指導しているのはトメアスー在住の高松寿彦さん。木々が育ちつつある畑を見ているプロジェクト・スタッフもトメアスー出身の 2 世、エジムンド・ワタナベさんです。